

# 自己中心性バイアスの社会心理学的研究

## —透明性錯覚における自己制御の役割—

Egocentrically biased estimation of how we look to others and the role of self-regulation

遠藤 由美\*

Yumi Endo

### はじめに

#### 1-1. 人はいかに自己を理解するか

我々人間はいかに自己を把握し理解するか？ これは、自己をどのようなものとして把握するかという問いと並んで、古来絶えることなく受け継がれてきた問題であり、今なお人々の関心を集めている問いである。このうち、後者、すなわち「どのようなものとして」という問いは、比較的容易に答えを得ることができる。心理学の黎明期にあつて、自己の問題と真摯に向き合ったJames (1890) は、自己を「知る者としての自己 (self as a knower)」と「知られる者としての自己 (self as a known)」とを概念的に区分した。そして、「知られる者としての自己」を心理学の研究テーマとして取り上げ、まさしく自己をどのようなものとして把握するかを検討したが、「知る者としての自己」への追究は結局放棄したのである。しかし実は、「知る者としての自己」こそがいかに (how) を自己を把握し理解するかという問いと深く関わっており、さらには、後述するように、知る活動の産物として自己把握・理解内容が形づくられるのである。

その後、多くの研究者がこの問題に挑み、これまでにさまざまな仮説が提唱されてきた。ここでは、自己をいかに把握するかについての代表的な理論のうち、対照的な方向性を示している2つの理論、すなわち自己知覚理論 (Bem, 1972) とシンボリック相互作用派による「鏡映的自己」についてまず簡単に紹介したい。

自己知覚理論は、人は他者の行動を見てその人がどんな人かを知るのと全く同様に、他者を眺めるように自らを観察し、理解するというのが基本的主張である。Bemの理論は行動主義の影響を大きく受けており、人間の内部の感覚や観念を極力排除しようとしたものである。彼は、

外に事実として現れ、誰の目にも明らかなものとして把握できる行動だけを頼りに、自分という存在のあり方を理解するのだと考えた。これに従えば、自分自身が把握する自己像も他者が抱く私についての像も、同じ情報を利用した重なりあうものとなると予測される。

これに対して、シンボリック相互作用派の研究者たちは、人は他者との相互作用の中で、ある役割を担い、たとえば、暖かく受容的な聞き手としての役割を担っているとき、その相互作用のもう一方の担い手である話し手のさまざまな反応によって、自らの役割状況を把握することができる、と主張した (Mead, 1934, Cooley, 1902)。たとえば、悩んでいる話し手が話続け、より深い開示をし、やがて少し苦痛から開放されたような表情をするなら、それによって聞き手としての私は受容的であり、よい聞き手であったことを初めて知るのである。ごく簡単に要約すれば、この2つの理論は、自己理解が自己完結的個人内過程か、それとも他者が介在する社会的過程かという点において、見解を大きく異にするのである。

しかしながら、後続の自己に関する社会的認知研究者たちは、これら2つの方向のいずれが正しいかという決着のつけ方を賢明にも選択せず、むしろ両者を統合する方向で研究を進展を図った。その結果、自己理解の過程が複雑なシステムをなし、自己理解のある段階で自分の行動から直ちに特性を推測する (自動的特性理論、e.g., Newman & Ulman, 1989) ことがあっても、それだけでは不確実性に彩られており、それらは他者から是認されることを通して妥当性を高め、より確信的な理解として確立すると考えられるようになってきている (Hardin & Higgins, 1996; Tice, 1992)。つまり、自分自身による自己把握は、他者からの追認を得て、真実性をもった自己理解 (私は本当に〇〇だ) となるとされている。より具体的には、たとえば人生課題 (life task; Cantor et al., 1986) や個人的努力目標 (personal strivings; Emmons, 1986) など個人内の基準に照らして自己を点検し評価することを通して自己を理解する過程がある一方、重要他者の視点や評価基準を内在化し重要他者が見るように自分を理解する過程というものもあり (Andersenら, 1995; 2001)、両者は統合され融合することによって、ある形での自己理解が構成される。要するに、いずれにせよ、他者からどう見られているかを把握する過程を回避することはできない、というのが現在のところ、自己研究が到達している最新地点といえる。

他方、人格・臨床心理学の領域に目を転じれば、Frued (1958) や Bowlby (1969) などが幼少期からの重要他者との交流が自己定義の枠組みを提供することを指摘してきた。また、さまざまな自己の統合・整合性が人格の健全性と精神的健康に関わっていることが論じられている。たとえば、現実自己 (自分でとらえている自己像) と他者から見られている (と本人が考えている) 自己、これらがそれほどの隔たりなく一貫性が高いなら、当人がその間で引き裂かれることは少なく十分な機能を発揮できるが、両者の隔たりが大きければ、防衛や自己欺瞞、さらには不安などを生起させることになり、精神的健康度にも影響する、と考えられている。このような考え方を基に Swann は自己確認理論 (self-verification theory) を提唱し、整合しない自己像間で引き裂かれる苦痛を回避するために、人は自分の自己概念と同じように自分を見てくれる他者と交流することを好み、たとえ否定的自己概念であろうとそれと一致した見方をしてくれる他者を選択する、と主張している (Swann, 1983; Swann et al., 1992)。

また、先に挙げたJames (1890) は、「知られる者としての自己」いわゆる自己概念を構成する要素のひとつとして「社会的自己 (social me)」を掲げ、知人の目に自分がどう映っているかを取り込んでそれが自己概念の一部を構成している、と述べている。彼は「知る者としての自己」がどのような精神活動をしているかについては結局のところ考察を積み上げることができなかったと自ら振り返り認めているが、しかし「知られる者としての自己」を追求する中で、他者の目に映った自己像を取り込むことを不可避的過程として考えていたことになる。このように、自己に関する研究においては、「他者が自分をこう理解している」という把握過程が自己理解に必然的に加わっていることを前提としてみなしていることが読みとれる。

### 1-2. 透明性錯覚

ここでひとつ大きな疑問が生じてくる。前述したように、自己研究の領域では多くの研究者が、他者から見られている自己像を本人が受け止め取り込んでいると考えているわけであるが、果たして、人は他者が考えている自己像を正しく理解できるのであろうか。先に紹介した研究はいずれも、他者が自分を理解している、その像をそのまま私たちはとらえることができることを暗黙裡に前提としていた。すなわち、図1を用いて説明すれば、私がとらえた他者による表象(②)は、他者が私を対象として形成した表象(①)と一致していることを前提としているわけである。だが、そもそも他者の心の内を正確に読むとすることができるかどうか、あるいはどの程度正確に読めるのか、実際には最近までほとんど問題にされてはこなかった。

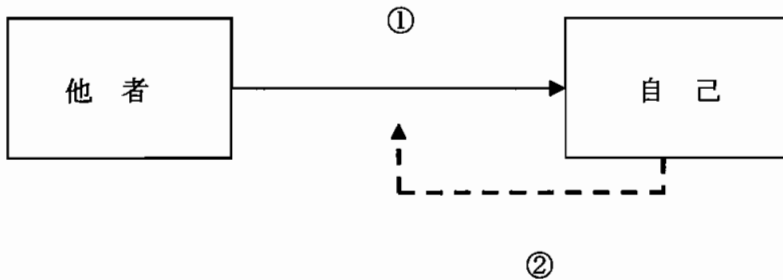


図1 他者からみられた自己とそれを理解する自己

近年の社会認知的研究は、人間がいかに認知・思考において間違い (バイアス、エラーなど) を犯しやすいかを明らかにしつつある。特に自己に関連する認知・思考の間違いとしては、自己ターゲット・バイアス (Fenigstein, 1984) や記憶の自己中心性バイアス (Ross & Sicoly, 1979) あるいは、わずかな行動からでも自分の特性が見抜かれてしまうと考えてしまうバイアス (Vorauer & Ross, 1998; Vorauer, 2001) などが報告されており、これらは利用情報における他者と自己との違いに気がつかないことが原因であり、自己の現象学的経験を越えることの難しさを示していると考えられている。要するに、他者がいかに世界を見ているか、それを人はなかなか理解できないことを示唆しており、さらに言えば、人は他者の心の内を正確に読むことの困難性を示唆していることになる。

認知的バイアス・エラー研究を率いているGilovichら（1998）は、人は他者から思考や感情などの自分の内面を見抜かれていると錯覚する傾向があることを見だし、「透明性錯覚（transparency effect）」と名づけた。すなわち、自分の内面で生起している葛藤や困惑などを、本当は他者はそれほど読みとれないにもかかわらず、当の本人は見破られた見抜かれてしまったと他者の透視力を過大視する、というわけである。招待された先で嫌いな食べ物を出され、「まずい」と思いながらも美味しさを装って食する時、あるいは上司が子どもの自慢話をするのをうんざりしながら聞く時、「まずい」「うんざり」という自分の内的状態が相手に見ぬかれたのではないかと不安を感じる経験などがこれにあたる。

彼らは、これを大学生を対象とした一連の実験によって実証的に検討した。実験は、まずいドリンク（これをターゲット・ドリンクとする）1つを含む5つのドリンクを飲ませておいて、その様子を見ている人に悟られないように反応を隠せという指示下で、まずさを味わっている時の嫌悪感が漏れ出てしまったと考えるか否かを検討した。観察者はビデオ映像を見て、5つのうちどれがターゲット・ドリンクであったかをあてるように求められ、正答率と味見をした参加者側の予測とが比較対照された。その結果、正確に見抜いた観察者の割合の2倍以上を味見した参加者は「見抜かれた」と予想したのである。換言すれば、参加者の嫌悪感は本人が予想した半分程度も他者には明らかになっておらず、自分が考えるほどには自分は透明ではなかったことになる。この他、嘘をつかせる、緊急事態を予想して心配するという状況を設定しているが、いずれも参加者は、自分の内的状態が他者の目には明らかになった、と実際以上にみなしてしまう傾向が報告されている（Gilovich et al., 1998）。

ここに二重のズレがある。1つは、当事者（実験の参加者）の経験が、他者（観察者）にはそれほど伝わらないというズレ、他の1つは他者には伝わっていないということが当事者には理解されないというズレである。このうち、後者のズレは、他者が思い描く自己像を当事者が把握し、自己の中に取り込むという部分に関連し、他者が考えている自己像を正しく理解できるのであるかという問いへの回答となるものである。つまり、Gilovichらの研究結果は、できないことを示唆している。

### 1-3. 透明性錯覚と自己制御

透明性錯覚がなぜ生じるかは、現在のところ次のようなAnchoring-adjustment 仮説で解釈されている。人が他者の内的状態を理解しようとしても、直接わからない。そこで、自分が感じている内的状態を準拠情報として、他者の心の内を推測する（anchoring）。同時に他者は自分自身とは異なるため、自分ほどには自分の心の内はわからないだとうとして調整、つまり割引を試みる。しかし、この調整が不十分であるため、実際の他者はよくはわからないことを思いつかない（Gilovich et al., 1998, p343）。したがって、実際の他者からの理解と自分が感じている内的状態の中間あたりに、他者はこう理解しているのではないかという推測を着地させることになる。

しかし、今しばらく上記の仮説に対して慎重な姿勢が求められだろう。というのは、ここにまだ明らかにされていない問題があり、透明性錯覚がどの程度の普遍性をもつか不明だからで

ある。透明性錯覚は、「自己の思考、感情、情動が実際よりも他者に対して明らかになっていると考える傾向」として定義され (Gilovich et al, 1999, 2001, p.90)、内的状態が社会的に望ましいものか否か、言い換えれば隠したいと動機づけられるものであるか否かは特定されていない。しかし、実際には彼らによる実験では、いずれも表出することが社会的に望ましくないとされる感情、たとえばdisgustを扱っており、それを隠すようにという明白な教示が参加者に与えられている。このような場合、透明性錯覚が生じたとしても、それが隠そうとしたけれどもうまくできなかったという自己制御の失敗感に基づくものなのか、それとも一般的に、自分の内的状態はどんなものであれ、すべて透視されているという錯覚なのか、区別できない。事実、嘘をついた時にはその狼狽が他者によって見抜かれると錯覚するが、真実を述べている時はそのような錯覚が生じないと報告されており、隠したいものを隠そうとする自己制御の試みの失敗感が透明性錯覚を媒介しているという理解も成立しうる。

そこで、本研究では、透明性錯覚における自己制御の役割を明らかにすることを目的とした。

## 研究 1

研究 1 は、自己制御と透明性錯覚との関わりを明らかにすることを目的として、ネガティブな内的経験ではなく、穏やかなポジティブな経験をする場合には、隠そうとする意図がうまく働いた、もしくは自己制御がうまくいったという感覚を人はもつことができ、したがって、透明性錯覚は消失するという仮説について検討する。穏やかなポジティブ状態を引き起こすものとして、本研究ではほのかな甘味を取り上げることとする。一般に、甘味はポジティブ経験として理解され、ハッピー感情を生み出すものとされている (e.g., Rozin, 1999)。

また、この研究においては、他者の見透かしに関わる要因についても併せて検討するものとし、他者が行為者のビデオ映像に基づいて判断する条件と、行為者がドリンクを飲む際に他者がそれを見ている条件の 2 つを設定する。これまでの透明性錯覚の研究においては、ビデオ映像に基づいて観察者がターゲット・ドリンクを判断するという手法が取られてきた (e.g., Gilovich et al, 1998)。透明性錯覚の実験においては、行為者予測、観察者予測、それに観察者の実際の正答判断が極めて重要な従属変数であり、行為者予測が見透かされることを「過大に」評価しているか否かは、行為者予測と観察者予測ないし観察者の実際の判断の正確性の間の差によって決定される。したがって、ビデオを用いた従来の手法がどの程度妥当かどうか検討してみることは意味がある。ビデオ映像では、行為者の顔に焦点が当てられ画面の中央に大きく映し出されるため、観察者の注意は、行為者の顔に集中的に注がれる傾向があると思われる。他方、行為時に傍らにいる他者は、ビデオ映像に比べて、たとえば、ジェスチャーや身体的揺れなどの豊富な情報を受け取るかもしれない。そのことが観察者予測や正答判断にどのような影響をもたらしているかは不明である。また、行為者にとっても、行為時には一人であり (実験者は斜め後方にいるので視野にははらない) 後であなたのビデオを他者に見せたらどうなるかの判断を求められるわけであり、そのような状況で他者が行為者の内面を見抜くということは、

通常他者と行為者が同時に同じ場所にいる日常場面での経験と隔たりがある。それが判断にどのように影響するかについては、これまでのところ検討されていない。そこで、研究2においては、行為者の傍らで実際に見ている他者（以下、これを傍観者と呼ぶ）と、従来どおりビデオ映像によって観察する他者（以下、これは観察者と呼ぶ）の2種の他者を設定した。

### 【方法】

**参加者** 行為者として大学生20名、行為者がドリンクを飲む時に、傍らで観察する傍観者20名、また行為セッション中に録画したビデオに基づいて判断する観察者として、別の大学生10名に参加を求めた。

**手続き** 参加者は味の違いを見分ける実験と称する実験への参加を要請される。実験室には、あらかじめ、トレーの上にドリンクが注がれた5つのカップが並べられた状態に準備されている。5つのドリンクのうち、4つはミネラルウォーターであり、他の1つは甘味水（液体ノンシュガーのガムシロップ小パック5ccをミネラルウォーター250ccで薄めた希釈液）であり、口に含むとほのかな甘みを感じる程度の濃さである。いずれも、各々10ccを紙カップに入れた。5つの白い紙カップには、太字黒インクでそれぞれ1～5の番号を大きく記入した。甘味水は#1のカップを避け、#2～#5までの系列位置の中でカウンターバランスした。ドリンクはいずれも無色、無臭であり、見た目には、どれが甘味水か判別困難である。ドリンクを準備する者は、実際に実験を遂行する実験者とは別人とした。

行為セッションの参加者は、2名が同時にドリンクの準備が整った実験室に案内され、くじ引きで行為者と傍観者に割り当てられた。行為者はトレーの前に立ち、傍観者はその斜め前の椅子に腰掛ける。ビデオカメラは、傍観者の横に行行為者の胸から上が写るようにセットされた。行為者と傍観者は、この実験は味の違いをどの程度見分けられるかを調べるためと説明され、次に行為者は5つのカップの中のドリンクを順番に、適当な時間間隔（1, 2, 3と心の中で数える）をあけて、ひとつずつゆっくり飲むように指示される。また、その際、「味の違いを顔などであらわしてはいけません」と教示した。「後で実験手順を確認するため」という理由で、この様子はビデオに録画された。他方、傍観者は、行為者がドリンクを飲む様子を見ているように指示された。

行為セッションの終了後、以下の3点について、行為者の回答を求めた：①味の違うドリンクが何番目だったか、カップの番号を記入するよう求めた。これは、行為者が実験操作を正しく理解していることを確認するためである。②仮に10人の他者があなたの様子を見たとしたら、どれが砂糖水だと当てられる人は何人いるだろうかを問い、0から10の正数で予測を求めた。その際、でたらめに回答しても理論的には10名のうち2名は正答となることを入念に説明した。③違う味のドリンクを口にした時、どの程度自分の顔の表情が変化したかについて、10件法で評定を求めた。他方、傍観者に対しては、観察者10名がいたら、味の違うドリンクが何番目を当てられる人はそのうち何名いるか、0から10までの正数で回答するよう傍観者予測を求めた。この際にも、理論的期待値が「2」であることを説明した。また、各行為者について、何番目がターゲット・ドリンクであったと思うか、1から5の番号で回答を求めた。さらに、行

為者は味の違いをどの程度表情などによって表出したかについて、10件法で回答した。これで行為者と傍観者の課題は終了した。

その後、2名から6名程度の小集団で観察者セッションが実施され、行為者がドリンクを飲んでいる場面を録画したビデオを観察者群に呈示した。行為者10名分のビデオを観察する観察者に10名を割り当てた。観察者には、「観察者10名がいたら、味の違うドリンクが何番目を当てられる人はそのうち何名いるか」と観察者予測を求めた。この際にも、理論的期待値が「2」であることを説明した。次に、各行為者において、何番目がターゲット・ドリンクであったと思うか、1から5の番号で回答を求めた。観察者10名の内、実際に正解を産出した人数が、行為者一人あたりの現実の正解者数となる。

**【結果と考察】**

まず、行為者予測、傍観者予測、観察者予測およびこれら2種の他者の正答を算出し、図2に示した。観察者のうち何人が違う味のドリンクをあてることのできるかについての行為者予測は平均すると3.00 (SD=2.15) であり、これは行為現場に傍らに居合わせた傍観者による予測平均値2.75 (SD=1.21) と有意な違いは認められなかった ( $t=.49, ns$ )。また、行為者予測はビデオ映像に基づく観察者予測平均3.48 (SD=.94) とも有意な違いは認められなかった ( $t=.95, ns$ )。したがって、研究1では、行為者は観察者以上に見透かされると過大視する透明性錯覚は見られなかったと言える。

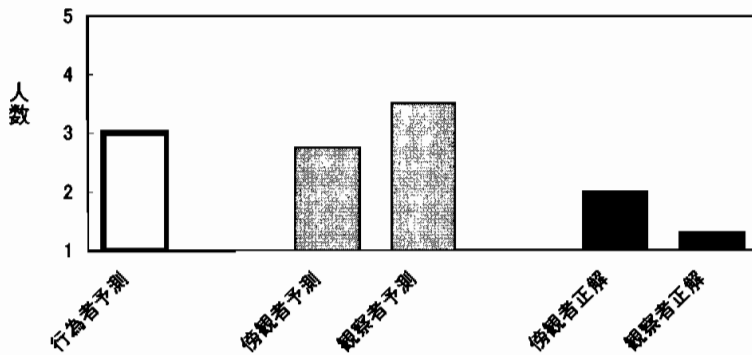


図2 行為者予測、観察者予測と正解者人数 (研究1)

では、他者 (傍観者と観察者) は現実どの程度ターゲット・ドリンクを言い当てることができただろうか。傍観者の正答数は20名中4名で理論値「2」と一致した。他方、観察者では平均1.3 (SD=.98) 人であった。行為者予測と比較してみると、行為者予測は傍観者正答 ( $t=2.08, p=.052$ ) および観察者正答 ( $t=3.53, p<.01$ ) よりも有意に高かった。他方、傍観者予測は傍観者正答よりも ( $t=2.75, p<.05$ )、また観察者予測は観察者正答よりも ( $t=7.54, p<.00$ )、有意に高い。言い換えれば、行為者自身が見透かされを過大に推測するのみならず、他者もまた見透かし能力を過大に推測していたと言える。

本研究では傍観者と観察者という2種の他者を設定した。彼らは予測において既に違いを示し ( $t=2.80, P<.05$ )、観察者予測が傍観者予測を上回っていた。傍観者の正答率は理論値どおり

であったが、観察者正答率は理論値よりも有意に低い ( $t=3.20, p=.005$ )。

行為者の表情変化についての評定は、行為者、傍観者、観察者の順に平均で4.55 (SD=2.26)、3.60 (SD=2.60)、3.68 (SD=2.60) となり、立場による違いは認められなかった。予測と正答数と表情変化の間の相関係数を算出したところ、観察者の予測と表情変化の間に極めて高い相関が認められた ( $r=.966, p=.000$ )。他はいずれも有意ではなかった。観察者は行為者の表情が変化したように思った場合は、大勢の人が見透かすだろうと予測したが、実際の正答には結びつかなかったことになる。

2種の他者の予測や正答率の違いがなぜ生じるかは本研究からは明らかにできないが、ひとつにはビデオ映像が伝達する情報とライブ情報とが情報の量や質において等しいとは言えない可能性があるからではないかと考えられる。しかしまた、観察者の正答率は理論値よりも低いことに注目するなら、正答率の算出方法が異なることが関係している可能性も考えられる。傍観者の場合は、行為者1名について1名の傍観者が判断するのに対して、観察者では行為者1名につき10名それぞれが判断し正答者を数え、観察者はそれを10名の行為者の映像に対して繰り返すという方法がとられた。立場による表情変化評定には違いが見られないにもかかわらず、観察者においてのみ表情評定と予測との間に強い関連性が見られたという先に述べた結果も、方法の違い説を支持するかもしれない。なぜなら、ビデオで行為者10名の映像を連続して観察することによって、行為者間の表情の動きの個人差に敏感になり、それを基に予測を立てたと考えることができるからである。透明性の実験では、これまで映像による判断と現場共存在者のそれとの違いが比較検討されていないが、本研究から必ずしも同じだと想定してはならないことが示唆される。さらなる検討が必要な点であろう。

研究1の結果をまとめると、穏やかなポジティブな内的状態に関しては、透明性錯覚が認められなかった。実験全体の手法はGilovichら (1998) を踏襲しているが、ひとつ異なるのは、参加者が味わったのはdisgustなどのネガティブな感情経験でなく、むしろハッピー感覚をもたらすほのかな甘味であった点であった。すると、他者から見抜かれているという錯覚が生じない、少なくとも他者が思う以上に過大視することがなかった。このことから、表出することが望ましくないと社会的に考えられているネガティブな情動や思考などの内的状態を統制しようとするものの、その際の自己制御が不十分だと思う感覚が透明性錯覚と関わっていると示唆される。これまでGilovichら (1998) ではネガティブ事象における透明性錯覚が取り上げられ、スポットライト効果 (Gilovich et al., 1998) など他のバイアス同様に、人が現象学的経験を越えることの困難さ、内的感覚が判断・推論に与える影響の重大性を示していると議論されてきた。しかしながら、本研究が示したように、透明性の錯覚は、自分の内面がどのようなものであれ、すべて他者によって見透かされているという錯覚ではない。「隠したい」「隠さねばならない」という動機づけが内部に存在し、かつ自己制御を試みるも十分ではない、という自己制御の不安全感が透明性錯覚の生起をもたらしていると考えられる。



## 研究 2

研究2では、内的経験を隠そうと意図しない場合、言い換えるならば自己制御が働かない場合、透明性錯覚が得られるか否か検討する。そのためには、表情にださないようにという教示を与えないだけでは不十分である。なぜなら、人にはそもそも自分のネガティブな感情を他者、とくに親しくない他者に対して表出することを躊躇い控える傾向があるため、教示の有無にかかわらずネガティブな内的経験の表出を自発的に抑制しようとして自己制御を試みる可能性があるからである。そこで、研究2においても、行為者が確かに一定の内的感覚や感情をもちながら、教示がなくとも表情表出を統制しようとするものがないものとして、穏やかな甘味が選ばれた。ポジティブな内的状態であっても、表情などの表出に関して自己制御を働かせない場合、表情など表出されたものに基づいて他者は正しく判断できると行為者は推測するだろう。しかし、これまでの研究は、他者は診断情報があっても本人が考えるほどには正しく読みとれないことを明らかにしている (Barr & Kleck, 1995, Griffin & Ross, 1991)。したがって、行為者予測は観察者予測よりも高くなり、透明性錯覚が生じると考えられる。

## 【方法】

参加者：大学生40名。このうち、20名は行為者、残り20名は観察者である。

手続きは研究1と基本的に同じであるが、以下の2点において異なる。

第1は、「味の異なるドリンクを飲んだ際にも表情を変化させないように」という教示を与えなかった。つまり、表情に関しては何も言及しなかった。これによって、自己制御が働かないようにするためである。第2に、実験の経済性のために、本研究ではビデオ観察者のみとし、行為者の傍らの傍観者は置かなかった。

## 【結果と考察】

行為者の透明度予測と観察者の予測、それに観察者の正答率を示したのが図3である。行為者の予測は平均5.70 (SD=2.96)、観察者予測は 3.90 (SD=1.67)、そして実際の正答率は 3.70 (SD=2.47) であった。行為者予測は観察者予測よりも有意に高く ( $t=3.00, p<.01$ )、また実際の正答率よりも高かった ( $t=2.79, p<.05$ )。しかし、観察者予測は実際の正答率との間に違いが

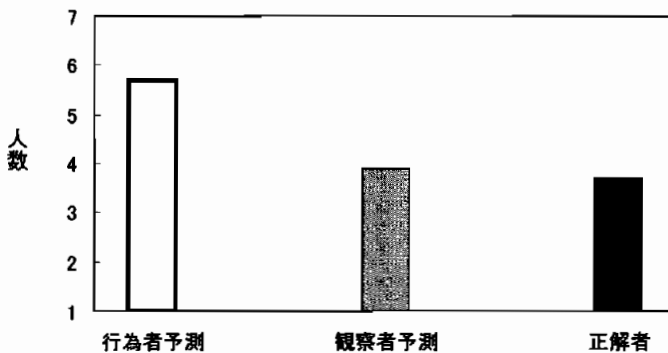


図3 行為者予測、観察者予測と正解者人数 (研究2)

認められなかった ( $t=.39, ns$ )。すなわち、本研究では、行為者は観察者が見抜ける以上にあるいはそう考える以上に、見抜かれるのではないかと他者の能力を過大評価する透明性効果がみられるが、自分が他人の心の中を正確に読めるという観察者側の見透かしの効果は得られなかった。

ターゲット・ドリンクを飲む際にどの程度表情が動いたかという表情変化についての評定は行為者では平均5.80 ( $SD=2.56$ )と観察者4.29 ( $SD=2.00$ )となり、両者の間に違いが見られ ( $t=2.47, p<.05$ )、行為者自身は表情に大きく出たと考えているのに対して、観察者はそうは思っていないことが示された。観察者では行為者の表情変化評定と観察者予測は高い相関があり ( $r=.743, p=.000$ )、研究1と同様、行為者の表情が変化していると考える時に、大勢の人が見透かすはずと予測していたことになる。しかし、実際の正答率は3.70 ( $SD=2.47$ )であり、これは理論値よりも大きく ( $t=2.93, p<.05$ )、観察者予測とは違うといえない水準であった ( $t=.39, ns$ )。

研究2において、内的経験として感じているものがネガティブでなく、またそれに伴う表情などの表出についてまったく何も規制されておらず、また自発的に隠そうとする意図が生じない場合、行為者は実際に他者が見透かしをおこなう以上に、見透かされたという予測をおこなった。しかし、ビデオ観察者の見透かし予測は、実際の正答者数との違いが見られず、また実際の正答者数は理論期待値2に比べて大きいことを考え合わせるなら、観察者が判断に用いる診断性の高い情報を利用できたことが推測される。その情報とはすなわち、異なる味を経験した際行為者が躊躇なく表出した表情や動作であろう。つまり、行為者はターゲット・ドリンク経験時にさまざまな信号を表出し、観察者はそれを診断情報として利用できたがゆえに、これならこのくらいの人が予測できるだろう、と比較的正しい予測を視得たし、また実際理論以上に多くの人が正解を言い当てることができたのである。そうであるならば、行為者予測が実際の正答者数や観察者予測に比べて有意に高いのは、飲むという行為を終えた後に予測しなかった予測課題を与えられて、「表出してしまったかもしれない」という取り消しのつかない過去の行動に対して1種の不安を伴う推測をおこなったのかもしれないと考えられる。穏やかなポジティブ経験において、表情など自己表出に対してなんらの規制がなく、したがって、評定段階になって自己制御が働いていなかったと感じるならば、他者に見透かされたのではないか、という不安感情が生じ、観察者よりも行為者は他者の見透かし能力について高い評価を与えてしまうことが判明したのである。

鎌田(2001)は、参加者にまず行為者役割を取らせてまずいドリンクを飲ませ、他者の目によってどれほど見透かされるかを推測させた。次に、観察者の立場に立たせてどれほど見透かすことができるとするか予測をおこなわせた。その結果、参加者は行為者経験をせずに観察者役割だけをおこなう場合よりも、観察者予測が有意に高くなり、「見透かす」能力の過大評価が見られたと報告している。これは行為者経験によって行為者の内面に対する理解が高まっているという錯覚が促進されたためと、解釈されているが、これをさらに一歩進めて言うならば、ネガティブな内的状態を経験し、それを示す何かをコントロールしようとしても漏れでそうという不安な感覚をあらかじめ味わうことで、観察者立場に立った時に、漏れ出てくる情報から

見透かせるはずだとして予測を上昇させたのかもしれない。したがって、ここからも、ネガティブな内的状態の表出の制御というプロセスが透明性錯覚に関わっていると考えることができよう。

Gilovichらの研究においては、ネガティブな内的状態を取り扱っているために、行為者自身と他者との予測がずれるという事態に対して、他者が人に対するネガティブな判断を表出するのを控え、その結果行為者自身の予測よりも観察者予測が低くなり、透明性錯覚が生じたという解釈が可能であった。つまり、行為者要因ではなく、純粹に観察者要因からの説明も成立し得た。本研究ではポジティブ経験を対象とした場合でも透明性錯覚が生起することから、他者がネガティブ判断を控えたという観察者要因の可能性は否定される。

本研究において行為者予測と観察者予測との間に有意な違いが見られ、Gilovichら（1998）の操作的定義に従ってこれを透明性錯覚とした。しかし、これは隠そうと意図しない場合であり、隠そうとしたのに見透かされたかもしれないという透明性錯覚とは異質のものと解釈することも可能である。ここで再度確認すると、Gilovichら（1998）は、透明性錯覚の論文の中で、他者が自分の内的状態を読める程度を過大評価する傾向を透明錯覚と呼ぶ（we refer to this tendency to overestimate the extent to which others can read one's internal states as the illusion of transparency. p.332）としており、隠そうとする意図やネガティブ事象限定性については言及していない。したがって、本研究で隠そうとしない場合に得られた結果を透明性錯覚と呼ぶことは何ら差し支えないと考えられる。また、逆説的ながら、これによって、透明性錯覚が「隠そうとする」という意図と深い関わりがあると考えられる。

## 総 合 考 察

研究1ではポジティブ経験において透明性錯覚が消失し、研究2の同じポジティブ経験を扱いながら表情統制についての指示をださない状況設定で透明性錯覚が生起した。このような結果を、Gilovichら（1998）の透明性錯覚実験の結果とつき合わせてみたい。両者が大きく異なるのは、内的経験のポジティブ・ネガティブという感情価である。これを1つの変数とし、他の1つの変数を表情など表出への統制（有無）とし、 $2 \times 2$ のマトリックスの中に結果を整理してみると、図4のようになる。ここで、ネガティブな内的状態時に表出統制なしという事態に関しては検討されておらず、結果は不明である。しかしながら、特別に親しい人、あるいは対人的葛藤関係にある人など一部を除いて、多くの社会的関係においては、ネガティブな内的状態を他者に示すことは社会的ルールとして容認されていないことが多い。たとえば、講演会や会合で話者の話が退屈であっても、人前であくびをすることは「はしたない」行為として咎められるだろう。すると、一般的にはネガティブな内的状態を表出することには、明白な指示がなくても必然的に抑制がかかるとみなすと、ネガティブで統制なしというセルは存在しないことになる。そこで、残り3つのセルについて考えよう。表出統制がない場合は、己の外に情報が伝わっているはずだと行為者は考えるが、実際には他者は当人ほどはそれを読みとれない

と考えるので、透明性錯覚が生じる。他方、表出統制がなされている場合、ポジティブ事象であればそれは統制できていると本人が仮定することになら不都合はないので、本人の他者推測能力に対する過信は生じにくく、透明性錯覚は生じない。しかし、ネガティブ事象であれば、統制したつもりであってももしそれが十分でない場合には社会的リスクが大きいことから、自己制御不全感が生じ、透明性錯覚が生じる。したがって、3つのセルで考えるならば、透明性錯覚が生じるのは、表出に対して自己制御しない場合、そしてネガティブな内的状態表出を統制しなければならないのに十分にはできなと感じられる時、透明性錯覚が生じることになる。したがって、自己制御の成否が透明性錯覚を媒介していると示唆される。

ここで、ネガティブ感情や思考は常に隠そうという意図が付随するだろうか、という問題について考えておきたい。というのは、ネガティブな感情・思考と隠そうとする意図の結びつきは、実際には文脈に依存にするからである。たとえば、イラク国内、そしてアメリカ国内では、それぞれ相手国に対する怒りの感情・思考表出は、望ましくないどころかむしろ場合によっては、内集団の結びつきを証明し促進するために、むしろ望ましいと判断されることがある。事実、ブッシュ大統領は、フセインやアルカイダ幹部に対して過剰と言えるまでの憎悪感情を表出し、それが少なくともある層の国民からの熱狂的支持を取り付ける役割を果たしている。したがって、このような場合は下の図4のミッシング・セルにはいる例であり、ネガティブ感情・思考表出は「社会的に望ましい」こととされ、ネガティブ感情であっても隠そうとする意図は付随しない。ネガティブな経験の表出がためらわれるのは、表出によって相手と自分との関係が損なわれる危険性のある場合であろう。たとえば、交流の場における相手自身に対する否定的感情であったり、あるいは、招待主のまずい食事のように、相手と関連性のある事物や他者である。

		事象の感情価	
		positive	negative
表出規制あり		透明性効果 なし	透明性効果 あり
		透明性効果 あり	?
表出規制なし			

図4 感情価と表出規制の関数による透明性効果の有無

2つの研究から、透明性錯覚はいかなる状況においていかなる内的状態をも他者から見抜かれると過大視する自己透明性錯覚ではなく、ネガティブな内的状態が主観的に経験されている時、隠したいと思う事柄に対して隠そうとする試みがうまくいかなかったのではないかと錯覚する現象だと言えることが示された。自らのネガティブな内的状態に過度に反応することは、実際に他者に顔面通りに（ネガティブ）に見抜かれてしまうことを防ぎ、つくろって隠すという努力を増大させることによって周囲に対する適応を高めている（Gilovichら, 1998）。そうで

あれば、常に内面を見抜かれていると過度な反応をする必要はないことになり、本研究で示したように、表出にためらいがあり（すなわち社会的に表出が望ましくないとされるネガティブ事象で）隠そうとする時に限って、透明性の錯覚が生起することで十分適応的であると考えられる。

日常生活においては、周囲の他者には明らかであるにもかかわらず、行為自身は知られていない、誰も気がついていないと思いこんでいる錯覚、透明性錯覚とは逆の「不透明性錯覚」と思われる現象を観察することがある。たとえば、儀式など正式の場で来賓が「うんざり」しながらスピーチをしていることが、聴衆である他者には明らかであるにもかかわらず、行為者は「一応きちんとこなした」と考えている場合、「他者の目にあきらかな程度」評価に関して透明性錯覚とは逆方向にある。他者の視線に対して自らを隠そうとし自己制御を試みるか否か、あるいはその自己制御がうまくいっていると感じているか否かが、透明性錯覚と「不透明性錯覚」の現象を分離すると考えられる。透明性錯覚とは逆の現象としての「不透明性錯覚」も、自己中心的バイアスのひとつとして検討が求められるが、その際自己制御感について検討する必要があるだろう。

自己中心性バイアス (Egocentric bias) は、自分の内部で起きている経験、自分の過去経験、自分の視点から見た空間的位置、それに伴う注意やリソースの配分のあり方・量などによって、つまり自分しか持ち得ない情報のあり方に強く規定された知覚や理解をしてしまうことから生じるが、厄介なことに、そのこと自体に気づかず、他者もまた自分と同じ知覚や理解を行っていると錯覚することがさらに加わる。透明性錯覚で言えば、自分の内的思考や感情があまりに強烈な経験であり、その経験に基づいて、経験していることが明白な現実・真実だと信じ（これを「素朴な現実把握」"Naive realism" という, Ross & Ward, 1996）、それゆえ他者も当然それを理解するはずだと考えてしまうのである。換言すれば、いわゆる知覚や世界の1次的理解のみならず、メタ認知レベルでも同様の認知的バイアスから逃れられないことになる。

自己の研究領域では、しばしば他者とは異なる自己特有の現象に関して、動機的側面から解釈が加えられることが多い。自己高揚などはその代表例である。他方、自己中心性バイアス研究は、必ずしも動機的側面を持ちださずとも、認知的な説明で十分説明可能であると主張して、動機か認知かという対立的議論を引き起こしてきた。しかしながら、そもそも動機と認知が独立した機能であるという保証はなく、本研究で示したように、認知的パラダイムの枠内でありながら、事象の感情価を変化させただけで異なる結果が生じることから、認知と動機が交絡して、ひとつの現象が生起すると考えるのがより妥当であろう。今後、そのような観点からの自己中心性バイアスのメカニズム解明が求められる。

引用文献

- Andersen, S. M., Glassman, N.S., Cen, S., & Cole, S.W. 1995 Transference in social perception: The role of chronic accessibility in significant-other representations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 41-57.
- Andersen, S.M. & Berenson, K.R. 2001 Perceiving, feeling, and wanting: Experiencing prior relationships in present day interpersonal relations. In J.P. Forgas, K.D. Williams, & L. Wheeler (Eds.), *The social mind: Cognitive and motivational aspects of interpersonal behavior*. Cambridge University Press, UK.
- Barrm C.L., & Kleck, R. 1995 Self-other perception of the intensity of facial expressions of emotion: Do we know what we show? *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 608-618.
- Bem, D. 1972 Self-perception theory. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol.6. Pp.1-62. Academic Press.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss*. Vol.1. Attachment. New York: Basic Books.
- Cantor, N., Markus, H., Niedenthal, P., & Nurius, P. 1986 On motivation and the self-concept. In R.M. Sorrentino & E.T. Higgins (Eds.), *Motivation and cognition: Foundations of social behavior*. Pp.96-127. New York: Guilford Press.
- Cooley, C.H. 1902 *Human nature and the social order*. New York: Scribner.
- Emmons, R.A. 1986 Personal strivings: An approach to personality and subjective well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 1058-1068.
- 遠藤由美 2002 人目意識と自己統制感 日本心理学会第56回大会大会発表論文集
- Fenigstein, A. 1987 On the nature of public and private self-consciousness. *Journal of Personality*, 55, 543-553.
- Frued, S. 1958 *The dynamics of transference*. Standard edition, Vol.12. Pp. 99-108. London: Hogarth.
- Gilovich, T., Kruger, J., & Savitsky, K. 1999 In M. Kowalski and M.P. Leary (Eds.), *The social psychology of emotional and behavioral problems*. 第3章 日常生活の中の自己中心性と対人的問題 臨床社会心理学の進歩-実りあるインターフェイスをめざして- 安藤清志・丹野義彦監訳 2002 北大路書房
- Gilovich, T., Savitsky, K., & Medvec, V.H. 1998 The illusion of transparency: Biased assessments of others' ability to read our emotional states. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 332-346.
- Gilovich, T., Savitsky, K., & Medvec, V.H. 1998 The spotlight effect in social judgment: An egocentric bias in estimates of the salience of one's own action. Unpublished manuscript, Cornell University.
- Griffin, D.W., & Ross, L. 1991 Subjective construal, social inference, and human misunderstanding. In M.P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol.24. Pp. 319-359. San Diego, CA: Academic Press.
- Hardin, C.D., & Higgins, E.T. 1996 Shared reality: How social verification makes the subjective objective. In R.M. Sorrentino & E.T. Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: The interpersonal context* Vol.3. Pp. 28-84. New York: Guilford Press.
- James, W. 1892 *Psychology, Briefer course*. 今田 寛 (訳) 1992 心理学 (上) 岩波文庫
- 鎌田晶子 2001 観察者の「透明性の錯覚」:『見透かしの錯覚』に関する手がかりの影響 日本社会心理学会第42回大会発表論文集
- Mead, G.H. 1934 *Mind, self and society*. Chicago: University of Chicago Press.
- Newman, L. & Ulman, J. 1989 Spontaneous trait inference. In J.S. Ulman & J.A. Bargh (Eds.), *Unintended thought*. Pp. 155-188. New York, NY: Guilford Press
- Ross, L. & Ward, A. 1996 Naive realism in everyday life: Implications for social conflict and misunderstanding. In E. Reed, E. Turiel, & T. Brown (Eds.), *Values and knowledge*. Pp.103-135. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Ross, M., & Sicol, F. 1979 Egocentric biases in availability and attribution. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 322-336.
- Ross, L., & Ward, A. 1996 Naive realism in everyday life: Implications for social conflict and

- misunderstanding. In T. Brown, E. Reed, & E. Turiel (Eds.), *Values and knowledge*. Pp.103-135. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Rozin, P. 1999 Preadaption and the puzzles and properties of pleasure. In D. Kahneman, E. Diener, & N. Schwarz (Eds.), *Well-being: The foundations of hedonic psychology*. Pp. 109-133. New York, NY: Sage.
- Swann, W.B.Jr. 1983 Self-verification: Bringing social reality into harmony with the self. In J. Suls & A.G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Vol.2. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Swann, W.B.Jr., Hizon, J.G., & De La Rond 1992 Embracing the bitter "truth": Negative self-concepts and marital commitment. *Psychological Science*, **3**, 118-121.
- Tice, D. M. 1992 Self-concept change and self-presentation: The looking glass self is a magnifying glass. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 435-451.
- Vorauer, J.D., & Ross, M. 1998 Self-awareness and feeling transparent: Failing to suppress one's self. Unpublished manuscript, University of Manitoba, Winnipeg, Manitoba, Canada.
- Vorauer, J.D. 2001 The other side of the story; Transparency estimation in social interaction. In G.B. Moskowitz (Ed.), *Future directions in social cognition*. Mahwah, NJ: Erlbaum.

本稿は、平成14年度奈良大学研究助成金によるサポートを得て行われた研究成果の発表とするものである。一部は既に学会にて発表されている（遠藤, 2002）。